

ルツェルン音楽祭2023②

期間 8月8日～9月10日

トラブルとスキャンダルに見舞われたルツェルン

取材・文 中東生
Foto: Shinichi Nakai

ユジャ・ワンのスキャンダル

ルツェルン音楽祭の今年のテーマは「天国」だったが、開催前からハプニング続きだったことは本誌10月号の海外レポートにも書いた。今年の「アーティスト・エトワール」ダニール・トリフォノフがスケジュール調整上の理由で3公演

中、1公演をキャンセル。リツカルド・シャイヤーが手術のためオーブニング・コンサートをふくむ2公演をキャンセル、マルタ・アルゲリッチも病欠と、音楽祭は代役等の対応を迫られた。

開幕後の8月25日は、音楽監督クラウス・マケラが率いるオスロ交響楽団とラヴェル「ピアノ協奏曲」を2曲披露したユジャ・ワンが、熱狂的な拍手を続ける聴衆の前に、3度短く姿を見せたあとは無視したように姿を消したため、交際のマケラと舞台裏で喧嘩していたから、と噂されるスキャンダルに発展した。

8月29日には音楽祭デビュー・リサイタルが予定されていたイサタ・カネー・メイソン（P）が、英国全域における航空管制トラブルで出国できず、公演中止となった。そして最後のハプニングは、終演6分後にはすでに報道され、その後も創立500周年を祝うヨーロッパ・ツアー中のバイエルン州立管弦楽団の各地の批評に一筆加えられるような波紋が続いたので、次にライヴ・レポートしたい。

演奏中に環境活動家が舞台に飛び乗り演説

前日の南チロル音楽祭からツアーを開

始したバイエルン州立管弦楽団は、9月8日、KKL（ルツェルン・カルチャー・センター）の音響に大満足だったというリハーサルを終え、晴れやかな表情で登場し、ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」前奏曲が始まった。音楽監督のウラディミール・ユロフスキは、このホールの透明すぎる音響に吸い込まれることなく濃厚なチェロを際立たせ、官能的ではないがスケールの大きい英雄的なワーグナーを聴かせた。続くシューマン「ピアノ協奏曲」では、その厚みあるオーケストラがピアノを包み込み、心を込めて一言一言語りかけるようなイエフイム・ブロンフマンのフレーズを際立たせた。第1楽章から聴衆は息を呑んで聴き入り、決して誇示せず、控えめで繊細な第2楽章、徹底して室内乐的な、お互いを敬うていねいな共演の余韻は休憩中も続いた。

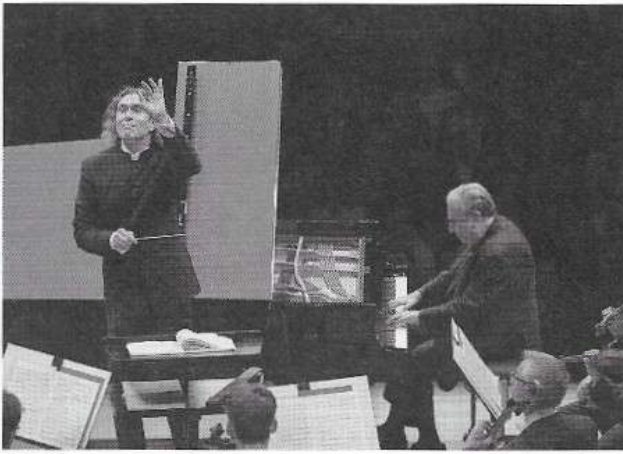
この二人は環境活動家で、舞台上で演説を始めるも聴衆に罵倒される。ユロフスキは「僕にまかせて」とジェスチャーを示し、指揮を続ける。女性活動家はときおり抗議演説を再開したり、抗議文句に節を付けて歌ったりするが、聴衆に黙らされる。綱渡りの第3楽章が終わると、ユロフスキは二人と話し、「話を聞けば、彼らは退場し、第4楽章を続けられる」と聴衆に解決策を提示した。しかし聴衆のなかには反論の野次を飛ばす者もいる。怒りを抑えたいような赤ら顔でユロフスキは「彼らとの約束を守らなければ、僕が退場するしかない」と説得することに成功し、指揮台の上に座り込んだ。活動家は感謝と共に「自分もクラシック・ファンなので邪魔するのは辛いのだが、いま行動を起こさないと」気候変動への危惧を訴えて二人は退場した。その後の第4楽章のすさまじいエネルギーは2度と体験できないのではないかと。

この間、音楽祭当局がなにも手を打たなかったのは不可解で、その対応のために不愉快な思いをしたユロフスキは気の毒だが、結果的には人間的に解決したその姿勢に敬意を表したい。じつはこの公演の前に音楽祭が「人権なしの天国はない」というパネル・ディスカッションも開催しており、その日の抗議なら「人権」という盾に守られると判断したのかも知れない。そこで強制退去させず、お互いの立ち位置を尊重した解決ができたことは、将来への布石になるかもしれない。

日本人が活躍

藤田真央と堀真菜

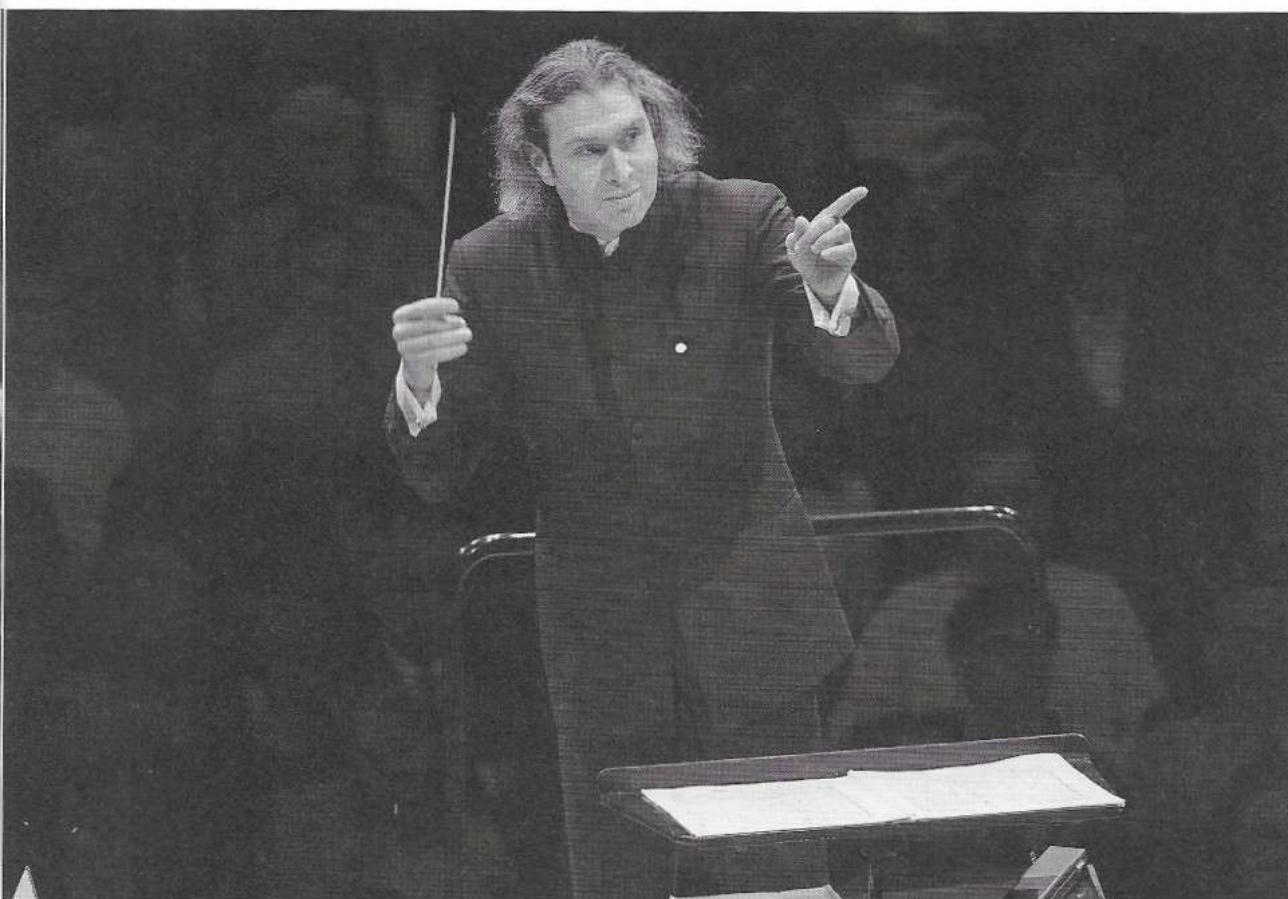
ハプニング以外で特筆したいのは日本



室内乐的なていねいな共演だった、ユロフスキとブロンフマン © Peter Fischli / Lucerne Festival

人の活躍だ。9月2日には藤田真央(P)の当音楽祭初リサイタルが開かれた。昨年リッカルド・シャイー指揮ルツェルン祝祭管弦楽団との共演でデビューしたと

きはスタンディング・オヴェーションを受けたが、それを知らない聴衆もまだ多い。晴天の土曜の午後、2階席までは8割がた満席という集客率は藤田に対する



演奏中に舞台上に乗った環境活動家と対話を行ったユロフスキ ©Peter Fischli / Lucerne Festival

注目度を表している。本人はとても緊張していたというが、いつものようなほんわかした雰囲気でも登場し、座るやいなやすぐシヨパン「ポロネーズ第一番」を弾き始めた藤田の音が、5階席まで響いて循環するのが心地よい。同「ポロネーズ第二番」は作曲家が乗り移ったかのような演奏で超弱音が美しい。その余韻をかき消されたのが惜しいほど、すぐに弾き始めた同「ポロネーズ第三番(軍隊)」は、重めできらびやかな誇張はなく、リタルダンドなども大胆で荘厳だ。同「ポロネーズ第四番」は少し間を置き、同「ポロネーズ第七番(幻想ポロネーズ)」は幻想的性格を前面に出し、サロンで弾いているシヨパン自身が人生を振り返っているかのよう。魂が昇天するようにきらめいて締めくくった。シヨパン解釈については反対意見も客席で聞かれたが、古い固定観念に囚われた感想、という印象を受けた。続くリスト「ソナタ」では藤田のスケール感が生きていた。アンコールのシューマン(リスト編)《献呈》は反対派も満足させる演奏で、会場を総立ちにさせた。当音楽祭の常連になるであろう成功だった。

その日の夜は、スザンナ・マルツキがルツェルン祝祭アカデミー管弦楽団を上手にまとめた演奏を聴かせたが、そのコンサートマスターとして堀真亜菜が存在感を放っていた。昨年小ホールで即興的現代曲1曲のコンサートマスターを務め、美音のソロも聴かせた彼女だが、今年は大ホールで、今年のコンポーザー・イン・レジデンスであるエンノ・ポツペ《Fett für Orchester》と、シエン奏者のウー・ウェイを迎えたチン・ウンスク《Su für Sheng und Orchester》のスイス初演、ストラヴィンスキー《春の祭典》の全3曲で活躍した。マルツキとアカデミー生たちの絆も感じられた。

結果的にはハプニングを乗り越えた満足度の高い5週間となり、集客率は昨年より10パーセント以上も増えた。



リサイタルで観客を総立ちにさせた藤田 ©Manuela Jans / Lucerne Festival